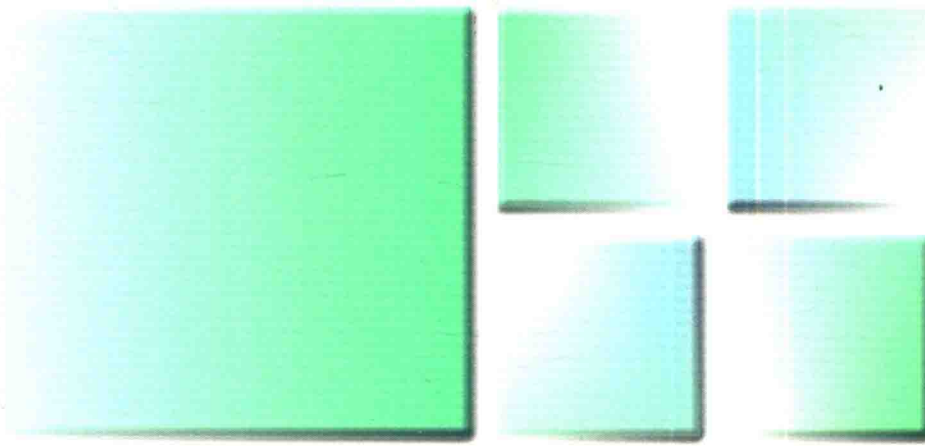


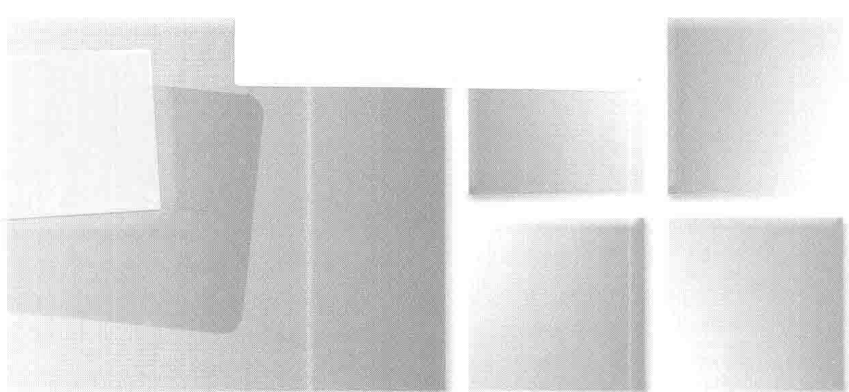


マイホーム神話の 生成と臨界

住宅社会学の試み

山本理奈

Yamamoto Rina



マイホーム神話の 生成と臨界

住宅社会学の試み

山本理奈

Yamamoto Rina

岩波書店

山本理奈

1973年生まれ、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程単位取得退学、博士(学術)(東京大学)、国立精神・神経センター精神保健研究所流動研究員、日本学術振興会特別研究員 RPD を経て、現在、東京大学大学院総合文化研究科学術研究員。専門は、現代社会論、都市住宅学、家族社会学。主要論文に、「住宅と家族をめぐる問題構成の批判的検証——脱 nLDK 論を中心に」(『思想』2012 年)、「〈選択の主体〉とアボリアの構図——女性と胎児の相克性をめぐる問題構成の社会学的分析」(『思想』2009 年)、「都市における住宅の商品化とその変容——家庭の空間から身体感覚の空間へ」(『社会学評論』2011 年)他。

マイホーム神話の生成と臨界——住宅社会学の試み

2014 年 2 月 26 日 第 1 刷発行

著者 やまもと り な
山本理奈

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・三秀舎 カバー・半七印刷 製本・牧製本

© Rina Yamamoto 2014

ISBN 978-4-00-024818-1

Printed in Japan

マイホーム神話の生成と臨界

住まいを再生する

——東北復興の政策・制度論

平山洋介編
斎藤浩編

A5判二五二頁
本体二九〇〇円

対談集 つなぐ建築

隈研吾著

四六判一九二頁
本体一八〇〇円

「家族計画」への道

——近代日本の生殖をめぐる政治

荻野美穂著

四六判三七八頁
本体三四〇〇円

「自由への問い？」
家族 新しい「親密圏」を求めて

岡野八代編

四六判二二〇頁
本体二〇〇〇円

〈定本 見田宗介著作集〉
現代社会の理論

見田宗介著

B6判二〇〇頁
本体二一〇〇円

わが家のミカタ

——天下無敵の住まい術

朝日新聞
「わが家のミカタ」編
取材班編

A5判二二〇頁
本体二〇〇〇円

岩波書店刊

定価は表示価格に消費税が加算されます
2014年2月現在

目次

マイホーム神話の生成と臨界

序 章 現代社会への問いとしての「住宅」…………… 1

第1節 問題意識——住宅を媒介として現代社会を考える…………… 2

1. 本書の課題 2
2. 問題意識の系譜 4
3. メディアとしての住宅 7

第2節 問題設定——社会学と建築学に共通の議論の場を探る…………… 10

1. 先行研究と本書の位置づけ 10
2. 対象と方法の問題 13
3. 本書の構成 18

第1章 住宅という「商品」…………… 25

——戦後日本における住宅の商品化

第1節 持ち家の変容…………… 26

1. 都市型持ち家社会の形成 26
2. 借家から持ち家へ 28
3. 持ち家の土地所有をめぐる断層 32
4. 持ち家取得方法の変化 35

第2節 住宅産業の成立…………… 39

第2章

脱nLDK論の陥穽からどう脱するか

——社会学と建築学に共通の問題構成へ

73

第1節

nLDK型住宅をめぐる批判の展開

74

1. 問題としての「nLDK」 74
2. 「nLDK」の起源をめぐる論争 75
3. 脱nLDK論の背景 80
4. 脱nLDK論の核心 82

第2節

脱nLDK論における問題構成の検証

86

1. 中廊下型住宅をめぐる解釈の誤謬 86
2. nLDK型住宅をめぐる解釈の問題点 88
3. 二つの解釈の言説的な差異 91

第3節

住宅政策の転換

55

1. 戦後における住宅供給業者の変化 39
2. 住宅の生産・供給システムの変遷 43
3. 産業としての住宅の本質 46
4. 住宅産業システムの変容 50
1. 階層別政策から持ち家政策へ 55
2. 住宅金融公庫の融資拡大 58
3. 日本住宅公団における分譲事業への重点シフト 63
4. 商品住宅の普及 68

4. 問題構成の限界と転回軸	92
----------------	----

第3節 nLDK型住宅をめぐる問題構成の転回	95
------------------------	----

1. 社会構造論的視点の必要性	95
2. 「51C」の精神とその挫折	98
3. 大衆消費社会の指標としてのリビングルーム	101
4. リビングルーム生成の社会的意味	103

第3章 マイホームの神話作用	107
----------------	-----

住宅広告と生きられる経験

第1節 マイホーム主義をめぐる言説の構図	108
----------------------	-----

1. マイホーム主義とは何か	108
2. 〈家郷〉の創造	110
3. 資本主義のシステムに対する適応	112
4. 「生」への希求	115

第2節 商品住宅の広告表現と神話作用	121
--------------------	-----

1. 神話作用とは何か	121
2. 住宅と家庭を結びつけるレトリックの言説	126
3. 神話作用の無根拠性	130
4. マイホーム主義の実定性	132

第3節 マイホーム主義の背面	137
----------------	-----

第4章——マイホーム神話の臨界

1. 少なく産んで豊かな暮らし 137
 2. 墮胎罪の廃止を求める女性運動の展開 142
 3. 家庭の幸福と〈選択の主体〉化 145
 4. 標準世帯の神話と実定性的変容 147
- 「LDK」空間の変容と居住者像の変容

第1節 「LDK」空間の分節変容

1. 〈マイホーム〉という主体とその不安 154
2. 「LDK」空間の形成と内部分節の変化 156
3. キッチン空間の分節化 158
4. 空間分節の焦点 162

第2節 商品住宅のモード

1. 商品住宅の趨勢 166
2. 東京という条件 169
3. 分譲マンション市場の三つの動向 173
4. モードとしての超高層マンション 178

第3節 居住者像の変容と消費社会の〈現在〉

1. 都市の居住イメージ 182
2. モデルルームにおけるキッチン空間の分節化 186
3. 広告表現における居住者像の不明瞭化 192

終章——住宅社会学の可能性に向けて

- 4. 商品化の焦点としての身体の快適性 197

203

第1節 住宅の商品化とその進展過程について 204

- 1. 〈消費社会〉化の進行と時期区分 204
- 2. 住宅の商品化の焦点とその移行 206

第2節 居住者像とその変容について 212

- 1. 〈マイホーム〉から感覚的な身体へ 212
- 2. 脱nLDK論という言説の位置づけ 214

第3節 今後の展望について 218

- 1. 新たな課題——権力論への接続 218
- 2. 都市住宅の可能性をめぐって——都市・住宅政策への接続 219

注 225

あとがき 271

初出一覧

引用文献

索引(人名・事項)

序 章

現代社会への問いとしての「住宅」

第1節 問題意識——住宅を媒介として現代社会を考える

1. 本書の課題

現代社会を記述しようとするとき、私たちはとすると現在の出来事だけに目を奪われてしまう。しかし出来事は必ずその過去があり、現在の表層だけではなくそうした過去の地層へのまなざしが、現代社会の記述には必要不可欠である。なぜなら現代社会とは、現在のありようを見る「共時的な視線」と、過去の歴史的な奥行を見る「通時的な視線」の交わるところにはじめて浮かびあがってくる対象だからである。それゆえ現代社会のありようを記述するときには、現代社会が抱えるさまざまな実践や言説の布置とその実定性的変化を考慮しなくてはならない。

しかしながら、この変化は必ずしも客観的に測定されるわけではない。歴史的な過去との差異は、その差異を見る視線がたえず自分自身で解釈しなおし、つくりなおしている部分を含むことにも反省の必要がある。⁽¹⁾この意味では、変化について語る言説は、それ自身の整合性や実証性だけでなく、別の視線による具体的な検証に身を委ねることはじめて意義を持つものといえよう。

こうした視点に立つとき、注目されるのは、二〇世紀の後半以降、現代社会が一九世紀以降の近代社会とは異なる新たな局面を迎えているという時代認識がくり返し語られてきたことである。すなわち、ゆたかな社会、孤独な群衆、管理社会、脱産業化社会、消費社会、情報社会、……等々の概念によって、「現代社会」に固有の特質ないし特徴的

な傾向をとらえようとする試みが重ねられてきた。⁽²⁾これらの概念や問いかけが指示している事態は、産業システムの高度化に伴う社会の変容と関係していると考えられるが、ここで本書が留意したいのは、人びとの関心が「生産」から「消費」へ重点を移していったことを問題化する言説である。

たとえば、W・W・ロストウは、経済成長の最終的な段階として「高度大衆消費」(high mass consumption)の時代の到来を予測したが、⁽³⁾同様の事態をJ・K・ガルブレイスは——ロストウとは異なる問題意識にもとづくが——「ゆたかな社会」(affluent society)という概念で表現した。⁽⁴⁾これらの言説がとらえようとしていたのは、現代社会で生起している事態が、単なる産業システムの構造的な変容にとどまらず、そのシステムに依存して生きる人びとの「生の様式」(lifestyle)の変容を同時に意味していたことである。



図序-1 現代社会論としての本書の課題

こうした現代社会論の問題意識の特色は、①産業システムの高度化、およびそれと相関する、②人びとの「生の様式」の変化、という二つの焦点が描く楕円のように現代社会をとらえている点にある。本書は、この現代社会論の問題意識をふまえたうえで、「住宅」を媒介として、現代の日本社会に生じている変容——「消費社会」化の進行——について考察を試みようとするものである。具体的には、第二次世界大戦後の高度経済成長以降における日本社会の構造的な変容を、①住宅の商品化の進展過程、およびそれと相関する、②居住者像の変容、という二つの焦点に準拠しつつ分析することが主要な課題となる(図序-1参照)。

また、その理論的な課題は、住宅を分析する問題構成の場を、近代家族論から消費社会論へと移すことにある。⁽⁵⁾そしてその目的は、社会学と建築学に共通する議論の場を社会学の側から模索し、住宅社会学のための新たな問題設定の場を練り直すことに

ある。その際、重要なことは、実証的な調査研究に接続しうるかたちで、問題設定の場を構成していくことにある。また同時に、住宅という商品とそれにかかわる言説を媒介として、高度に「消費社会」化した現代社会における人間の「生の様式」を考察することが、理論的にも方法論的にも重要な課題となる。それゆえ、現代社会論を空疎な批評におわらせず、現代社会を生きる人びとの〈生きられる経験〉とその実定性の変容を記述する〈社会記述〉のひとつの実践となるかどうか、それが本書の最も重要な賭け金となるだろう。

2. 問題意識の系譜

〈生きられた家〉という問題意識

現代社会を「住宅」という視角から分析する試みとして、先駆的な研究を行ったのは多木浩二の『生きられた家』(一九七六年)という著作である。⁽⁶⁾このなかで多木は、現代は、「住むことと建てることの一致が欠けた」時代であるという重要な指摘を行っている。多木によれば、日本の古い民家には「住むことと建てることが同一化される構造」があったが、今やそれが失われつつあるという。⁽⁷⁾

汽車に乗って長い旅をしながら窓外をみていると、コンクリート・ブロック、トタン、カラー鉄板、ブラッチツクの波板、アルミサッシなどが国中にひろがり、家の面影を変えているのが手にとるように見えてくる。いわゆる民家はまもなく消えてしまうだろう。民家がなりたつ条件そのものが社会から消失しているのだ。おそらく農村そのものが消えようとしているのだろう。たとえば屋根を葺く材料も少なくなり、屋根を葺くために必要であ

つた共同体(ゆい)もほぼ解体している。いま、このような家を原型のまま維持するとしたら、それは生活ではなく文化財として保存が加えられねばならない。⁽⁸⁾

古い民家人が人びとに安らぎを与えるとすれば、それはかつての「自然的な環境」のなかで、人びとが暮らした「家」がかいまみられるからである、多木はいう。「われわれは煙に汚れているががっしりとした小屋組みにも、土間の適度な硬さにも、『住まうことに由来し』た建てるいとなみを感じとる」⁽⁹⁾ことができるからである。こうした「住むこと」と「建てること」の一致が現代に生きる私たちには欠けており、そうした現代社会の本質を、〈生きられた家〉という人びとの生活の痕跡の次元を介してとらえること、多木が設定したのはおよそこのような問題であった。そしてこのような問題意識をもった理由を次のように述べている。

生きられた家という主題はかなり以前から抱いていたものだ。ひとつには生、き、ら、れ、た、ということばが端的に示しているように、現象学的な考え方、経験される秩序を根源的なものとする考え方に刺激されたことであつた。

…〔中略〕…だがもうひとつ、生きられることによって家に生じる、それとは相反する性格が注意をひいた。日常的な家はメルローポンティイラのいう始源的空間にちかづくどころか、反対に消費の宇宙、社会的にますます制度化される意味に回収されてしまう現象にたえず遭遇し、イデオロギーの産物に化しているからである。しかも身体空間が根源的であるのと同様、この現象は現代の人間と社会の本質をなしている。⁽¹⁰⁾

〈生きられた家〉という問題意識を喚起した要因として、多木は、①現象学の影響、②社会的意味への関心、という二点について言及している。①については、本人も述べているように、「生きられた」ということはその影響が端

的に示されているといえよう。⁽¹¹⁾ただここでは、むしろ②の点についてももう少し多木の説明を敷衍してみたい。なぜなら、日常的な家をとらえるうえでは、現象学的思考だけではなく、生きられることによって生じる社会的な意味の次元に対する理解が重要であると、多木が指摘しているからである。

住宅の社会的意味

多木によれば、〈生きられた家〉が私たちをひきつけるのには、次の二つの理由があるという。すなわち、それが、
(1)人間によって生きられた空間と時間の性質があらわれた記号群であること、(2)この記号には階層化された社会のなかでの欲望——生活術がつくりだすさまざまな虚構的現象が読みとれること、以上の二点である。⁽¹²⁾重要なことは、〈生きられた家〉を読むということが、たんにある個人の私的経験を理解するだけではなく、その時代社会を生きる人びとの集合的经验について理解しようとする試みに開かれていることにある。

生きられた家は、あらゆる時代のデザインを無差別に利用し、風化し、恣意的でまがいものに充滿しかねない空間である。生きられる空間はさまざまな矛盾にとむ現象であるが、同時に、知覚作用、知的(技術的)操作、欲望の深さにもとづく「生活術」に構造化された記号の織物(テキスト)なのである。⁽¹³⁾

ここで多木は、〈生きられた家〉をひとつの「織物(テキスト)」として読むことを提起している。多木によれば、家とは、「人間の現実的な社会性そのもののなかに成立してきたもの」であり、「人間の行為と社会的な関係に織りあげられ、人間と社会の像を自らのなかに目に見えぬ文字のように織りこんでいる」という。⁽¹⁴⁾それゆえこのテキストは、たんにひとりの個人が経験する次元だけではなく、人びとが集合的に経験する「社会性」の次元によっても織りあげ